様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：１２６１３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２２２５

研究課題名（和文）ドイツ民族主義宗教運動と視覚文化をめぐる総合的研究

研究課題名（英文）A comprehensive study on German voelkisch religious movements and visual culture

研究代表者
深澤　英隆（Fukasawa, Hidetaka）

一橋大学・大学院社会学研究科・特任教授

研究者番号：３０２０８９１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近年文化研究の新たな視角・方法として国際的に注目を集めている「視覚文化（ヴィジュアル・カルチャー）」論の観点を取り入れつつ、宗教と視覚文化との関連を、特に19世紀末以来のドイツ民族主義宗教運動を事例として解明することを目指したものである。民族主義宗教運動家であると同時に画家でもあったL・ファーレンクローク(Ludwig Fahrenkrog)やヘルマン・ヘンドリッヒ(Hermann Hendrich)などの作品と芸術思想・民族主義思想の検討を通じて、本研究は、近代における視覚文化と宗教および民族主義との錯綜した、また密接な結びつきを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、第一に日本においてはなおほとんど着手されていない視覚文化論や物質文化論の観点からの宗教研究に取り組んだ点に、また第二に海外においてもまったく論じられていないドイツ民族主義宗教運動の美的・芸術的潮流について、その担い手たちの残した第一次資料をも検討しつつ論じた点にある。また視覚文化は、近現代社会のすみずみまで浸透し、多様な機能を担っている。しばしば意識されないこの働きを、とりわけナショナリズムや民族主義との関わりで解明したことは、一定の社会的意義を有するものと思われる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the relationship between religion and visual culture in terms of the case study of the German nationalist religious movement since the end of the 19th century. Through the perspective of "visual culture" theory, which has recently attracted international attention as a new perspective and method of cultural and religious studies, this study examined the works as well as religious/artistic thoughts of Ludwig Fahrenkrog and Hermann Hendrich, who were both nationalist religious activists and painters at the same time, and revealed the intricate and intimate connection between visual culture, religion and nationalism in modern times

研究分野：宗教学l

キーワード：宗教民族主義　視覚文化　宗教的視覚文化　ドイツ民族主義宗教運動　宗教芸術　ドイツ国民主義　宗教的物質文化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

視覚文化（visual culture）およびそれを論じる視覚文化論の概念は、この 20 年ほどのあいだに、美術・芸術(史)学に決定的なパラダイム変換をもたらすとともに、それ以上に文化研究を中心とする多学科にまたがる研究パラダイムとして、着実に定着してきた。視覚文化論の興隆は、現代社会の視覚的体験とメディアの多様化に由来する部分が大きいが、同時にまた、従来の文化研究における文字・テクスト文化の過度の偏重への修正という側面もある。いずれにせよ「言語論的転回」に続くいわゆる「文化論的転回（cultural turn）」の文脈において、視覚文化論はその中核的部分を占めてきたと言うことができる。

こうした点からすれば、宗教研究と視覚文化論との結合や交錯ということが、当然予想されるところである。しかし、宗教における視覚文化の諸問題を扱った研究は、なお決して多くはない。これまでのところ、主として英語圏の学者が、従来の宗教美術史やテクストを中心とした宗教研究に異をとなえて、おもにキリスト教史、ことに大衆的なキリスト教視覚文化の問題を探求している。研究者としては、Sally Promey、Brent Plate、David Morgan などの名をあげることができる。さらに「宗教視覚文化研究センター」(Center for Studies in the Visual Culture)がウェールズ大学に設けられたほか、専門雑誌もいくつか創刊されえいる。

研究代表者は、これまで主として近現代ドイツ語圏における宗教思想運動、ことにキリスト教に対抗し、ゲルマンの神々や古代ゲルマンの宗教的エトスを現代に復興させようとする、戦前期のいわゆる「民族主義宗教」(völkische Religion)の諸運動に重点をおいて研究を進めてきた。そしてこの運動においては、絵画、さまざまな書籍や雑誌メディアのヴィジュアル表現、儀礼における視覚文化の援用などを通じて、宗教的視覚文化が当時としては異例なまでに活発に展開されていた。こうしたことから、ドイツ民族主義宗教運動における視覚文化の展開を跡づけるとともに、視覚文化と宗教との関係一般をも考察することを企図するに至った。

２．研究の目的

以上のような問題意識に基づき、本研究は、近年文化研究の新たな視角・方法として国際的に注目を集めている視覚文化論の観点を取り入れながら、宗教と視覚文化との関連を、特に 19 世紀末以来のドイツ民族主義宗教運動を事例として、総合的に考察することを目的として設定した。この主題設定によって、本研究は、以下の二つの目的の達成を目指した。

(1) これまでの宗教的視覚文化およびそれと深い関連のある宗教的物質文化に関わる議論を整理するとともに、従来の理論的な展開における欠落点を確認し、宗教的視覚文化論の新たな展開の可能性を探る。
(2) さらに事例研究によって、ドイツ近代宗教文化史の未開拓な分野であるドイツ民族主義宗教運動の解明を進め、そのうえで同宗教運動の美的・芸術的潮流の展開にかかわる資料発掘および歴史的跡づけを行い、また視覚文化論との関わりで、その理論的解明に努める。

３．研究の方法

研究の方法としては、まず宗教と視覚文化に関わる理論的文献の収集と検討を行うとともに、ドイツ民族主義宗教運動に関わる一次資料の発掘をドイツの資料館（ベルリン・ギャラリー、プリンツホルン研究所）および図書館（ベルリン国立図書館、バイエルン国立図書館）などで行った。加えて、ドイツ民族主義・民族主義宗教運動に関わる物質文化である建築・記念碑（ヴァルプルギス・ハレ、ヴァルハラ神殿等）を調査した。以上の資料収集および調査にもとづき、ドイツ民族主義宗教運動の美的・芸術的潮流の歴史的解明と理論的検討を進めた。

４．研究成果

研究成果については、大きく２点にまとめることができる。

(1) これまでの視覚文化論一般および視覚文化と宗教との関係にかかわる議論を概観し、整理することにより、視覚文化論の成果のうち、宗教研究にとって意味あるものを確定し、また同時にこれまでの宗教研究において、視覚文化論的視点が欠落していた理由は何か、またこの視点が宗教研究にもたらす新たな視座と発見はどのようなものであるかを詳しく検討した。その結果、以下の２点を確認した。

まず第１に、これまでの宗教研究が、文字と文書の研究を核としてきたことが、あらためて痛感された。「イコン的転回（iconic turn）とも言われる展開が文化研究によりなされたが、宗教学においてはまだまだ文字データをベースとした研究が圧倒的多数を占める。いわゆる宗教芸術についての研究はある程度なされているが、そのほとんどは旧来の美術史や芸術学の手法を主としたものである。宗教的視覚文化の文化・社会的機能への着目は宗教学ではまだほとんどなされていないのが現状であり、このアプローチの必要性を再確認した。

第２に、これまでの宗教的視覚文化の研究は、キリスト教文化が中心であり、加えてその関心対象は、現代の大衆的キリスト教文化に属する諸現象に集中している。ここからすれば、研究対象の時代や幅はより広げられる必要がある。本研究は、ドイツ民族主義宗教運動という、反キリスト教的な宗教運動を対象としていること、またこの宗教運動の組織化は、大衆的なそれというよりも、いわゆる「知識人宗教」的な性格が色濃い。この意味で、エスタブリッシュメントの宗教文化とも大衆的なそれとも異なる、しかし近現代の宗教状況において核心的な意味をもつ知的中間層の宗教文化の研究としても、本研究は独創性をもっている。

(2) 第二の成果は、具体的な事例研究として、19 世紀末を中心に、第２次世界大戦終結期にまで至るドイツ民族主義宗教運動を材料とし、そこに展開された宗教的視覚文化の多面的なありかたと意義とを探った点にある。事例研究の対象としては、主として２人の宗教運動家を取り上げた。またこれら二者は同時に、名の通った職業画家でもあった。

まずルートヴィッヒ・ファーレンクローク(Ludwig Fahrenkrog, 1867-1952)は、教授号を

もつ美術アカデミー教師であるとともに、「ゲルマン的信仰共同体」なる新異教主義宗教運動の創唱者であり、リーダーでもあった。また、ヘルマン・ヘンドリッヒ(Hermann Hendrich,1854-1931)もやはり職業的画家であるとともに、新異教主義・民族主義的な「ヴェルダンディ・ブント」(Werdandi-Bund)の創設者であった。本研究では、これら二者について、以下の諸点を明らかにした。①まず各々の民族主義的宗教思想の詳細と、その宗教思想運動の組織的特徴を明らかにした。すなわち、同時代の新異教主義、フェルキッシュ（民族）主義的宗教=政治文化のなかでの三者の位置づけを試みた。②二者の画家、造形作家、宗教儀礼創造者、宗教建築設計者としての宗教的視覚文化の創造活動を跡づけ、両者の創出した宗教的視覚文化が、どのようなメディアを媒介として、いかなる形で流通したか、またそれらはいかに受容・享受されたかを解明した。③両者の芸術思想を第一次資料により検討し、具体的な作品との関連、およびそれぞれの宗教思想と芸術思想との関連を探り、芸術思想がどのようなかたちで宗教的視覚文化を支えたこと、同時に後者が前者の枠組みを超えた社会的機能を果たしたことを検証した。またドイツ民族主義宗教運動の美学と、ドイツ・ロマン主義以来のいわゆる「芸術宗教」の潮流とのアンビヴァレントな関係をも確認した。

以上の研究成果は、研究期間内に行われ、別に掲げた論文および令和２年冬に刊行予定の共編著『越境する宗教史』所収の論文、「『芸術宗教』と『宗教芸術』—宗教と芸術の境界域—」において提示されている。

本研究は、視覚文化研究と宗教研究の双方に貢献をなすものと考えられる。まず、視覚文化研究において、宗教を主題としたものは、なお数が限られており、とりわけ日本においては、ほとんど皆無に近い状態だと言える。また既述のように、これまでの海外の研究は、キリスト教文化が中心であり、加えてその関心対象は、近代以前のキリスト教美術に属するものと、現代の大衆的キリスト教文化に属する諸現象にもっぱら集中している。これに対し、本研究は、民族主義宗教運動という、そもそも通常の宗教研究においてもなお未開拓な領域を対象としており、内外の研究に欠落している部分を補完するものと言える。そもそもドイツ民族主義宗教運動は、ドイツ本国を含め、なお世界的に見てもほとんど研究がなされていないのが実情である。とりわけこの宗教潮流の美学・芸術的潮流については、これまでまったく研究が無い。その意味では、本研究はそのオリジナリティーにおいて、一定のインパクトを持つと考えられる。

今後の展望としては、まずは宗教の視覚文化的要素が、単に宗教思想に従属するものではなく、それと相補的な位置にあるとともに、むしろ独自の喚起力と伝達機能をもった宗教文化の要素であることを踏まえつつ、宗教視覚文化論の対象領域と主題範囲をさらに広げてゆくことが必須であろう。またドイツ民族宗教については、なお一次資料の発掘もほとんどされていない。本研究では、限定的ながらその一部に着手した。今後は資料発掘とその宗教学・宗教史学的解明がさらに本格的になされるべきものと考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 深澤英隆
２．発表標題 ドイツ民族主義宗教と美学的なるもの
３．学会等名 日本宗教学会第77回学術大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 深澤英隆
２．発表標題 脱伝統の可能性と不可能性：ジンメル宗教論の諸相
３．学会等名 京都ユダヤ思想学会第２回関東大会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 深澤英隆
２．発表標題 「芸術宗教」から「宗教芸術」へ ：ドイツ民族主義宗教運動における美学的なるもの
３．学会等名 テュービンゲン大学・立教大学第２回国際ワークショップ（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 深澤英隆
２．発表標題 表象しえぬ古代の表象ードイツ・プレファシズム期における視覚文化ー
３．学会等名 日本宗教学会第76回学術大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 平藤喜久子（編）深澤英隆、鈴木正崇、臼井陽、ベルンハルト・シャイト、クラウス・アントーニ、シルヴィオ・ヴィータ、月本明男、新免光比呂、久保田浩、松村一男	４．発行年 2020年
２．出版社 北海道大学出版会	５．総ページ数 290（197-218）
３．書名 『ファシズムと聖なるもの／古代的なるもの』：第10章「表象し得ぬ『古代』の表象ードイツ・プレファシズムにおける視覚文化」（深澤英隆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考